

原発事故によって、 避難所を転々とした日々。 そこには医師と患者との 強い絆があった。

福島第1原発事故によって、現在でも避難生活を余儀なくされている福島県双葉郡浪江町。長期化する避難生活で健康を害する高齢者が急増するなか、震災以来、その傍らに寄り添って診療をつづけてきた 津島診療所の関根俊二先生。震災後の地域医療をいかにして再生させるか、現場からの声に耳を傾けたい。

Photo: Nana Suzuki Design: Takayoshi Ogura

浪江町国民保険津島診療所
所長 関根俊二氏

聞き手・女優

紺野美沙子さん



紺野 浪江町にあった津島診療所は、いま二本松市油井の仮設住宅の中にあります。この場所に落ち着くまで、大変なご苦労があったとか。

関根 津島地区は浪江町でも山間部なので、ライフラインとかは特に問題なかったんです。三月十一日は金曜日で、土日は診療所が休みですから、私は普通に診療を終えて、いったん郡山の自宅に戻りました。そこでテレビを観て、初めて被害の大きさを知ったんです。翌朝、急いで診療所に戻ったら、まわりは黒山の人だかりですよ。津波と、それから原発が危ないということまで避難してこられた方たちです。みなさんの身の着のまま、薬がほしいと。津島地区に避難してきた人はピークで八千五百人。もともと住民が千三百人いましたから、一時は一万八千人が津島にいたことになりました。

紺野 そこに原発事故が追い打ちをかけたわけですね。

関根 十二日、無我夢中で診療している間にドカーン！となったでしょう。でも、三十キロも離れているから、まさか放射能がこっちまで来るとは、誰も思っていなかったわけです。

紺野 放射能に関しては、まったく無防備な状態で……。

関根 はい、そうです。僻地診療所ですから、待合室なんて小さいもんです。患者さんたちは外の道路にずらーっと並んで待っていました。我々年取っている人間はあんまり影響ありませんけど、やっぱり子供さんですよね。当時、まだオッパイを吸っているような子供さんもいたし、それから、あと幼稚園の子供さんも、学童期の子供さんもみんないたわけです。放射能汚染なんて知らずに、外で遊んでいたんです。ですから、児童被曝が一番の問題でしょうね。



上：震災前の浪江町国民保険津島診療所。近隣からクルマで通ってくる患者さんも多く、1日平均40人くらいを診察していたという。下：現在の津島診療所で働くスタッフのみなさん。紺野さんを囲んで。

紺野 避難指示が出たのは、いつの時点だったんですか？

関根 十五日の十時半頃でした。か、役場の課長さんが来て「これも危なそうだから、診療が途切れた時点で避難してくれ」と。私は寝たきりの義母を抱えていたものだから、いったん郡山の自宅に戻ったんです。

紺野 住民のみなさんは二本松の東和地区に避難したんですね。

関根 そうです。そうしたらまた課長さんから「診療所がないとどうにもならないから、先生帰ってきてくれ」と連絡があった。そこで三月十九日に、東和地区で仮設診療所を立ち上げた

紺野 みなさん安心されたんじゃないですか。先生の顔を見て

関根 「また先生に会えるとは思ってもいなかった」と喜んでくれましたよ。

紺野 津島診療所で十年。それだけ長い間、地域でお仕事をされていたら、地元のみなさんからの信頼は厚いですね。東和地区に避難したあとも、浪江町のみなさんと行動をとりにされたわけですね。

関根 東和地区では、みんな集会所とか体育館でごろ寝ですからね。このままでは住民の健康状態が心配だということで、福

今、医師としてのあなたを 日本でいちばん求めているのは、 東北です。

たとえ病棟があっても、立派な医療設備があっても、清潔なベッドがあっても、お医者さんがいなければ、そこは病院とは言えない。いま、東北が直面しているのは、その現実です。そして、東北の医師が不足しているという現実、東北以外のお医者さんにしか救えない。そう思うのです。この誌面を借りて、医師であるあなたにお願いがあります。移り住んで来てほしいとは申しません。週に2、3日、一年にすれば100日程度でもいい。あなたの時間を分けていただけないでしょうか。東北の力になっていただけないでしょうか。人の幸せは、健康があってこそ生れるもの。そのことを誰よりも知るあなたの力を、今、誰よりも求めている人々が東北にいます。



東北医療福祉事業協同組合 **どこよりも、いのちを愛する東北へ。**

東北エリアにおいて医療・介護などの豊富な経験をもとに経営環境向上のための運営支援、また、人材確保や教育までトータルにサポートします。

■上記広告に関するお問い合わせは

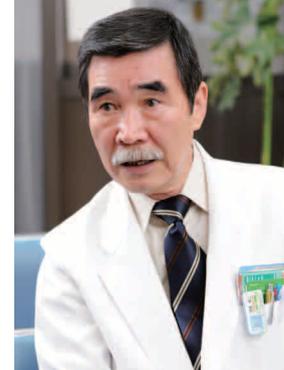
E-mail: doctor@sg-kumiai.or.jp **Tel: 0800-800-5533 (通話料無料)**

受付時間 平日9時～17時(土日祝日は除く)

東北医療福祉事業協同組合 仙台事務所
〒980-0022 宮城県仙台市青葉区五橋 1-1-17 仙台ビルディング駅前館6階

URL <http://www.sg-kumiai.or.jp/>

検索キーワード



関根俊二

Shunji Sekine

昭和17年5月4日東京市深川区生まれ。昭和20年福島県民となる。昭和44年3月福島医科大学卒業後、山形県南陽市立総合病院、水戸済生会病院勤務を経て、昭和47年福島医科大学第2外科入局。昭和53年国立郡山病院外科勤務。平成9年4月から浪江町国民健康保険津島診療所に勤務、現在に至る。

島県内の温泉地に移動したんです。浪江町の避難民が多かったのは岳温泉。そこに五カ月間いました。そして二十三年九月にこの油井の仮設住宅に移ってきただけです。

紺野 避難生活で体調を崩された方も、大勢いらっしゃったんですね。

関根 最初の半年、高齢の方や病弱な方が次々にお亡くなりになりました。それがいま災害関連死三百人以上という状況になってるんです。

紺野 津波や地震でお亡くなりになった方を上回っていますからね。こちらの仮設住宅も高齢の方が多くですね。

関根 いまこの仮設住宅は二百

八十八世帯。高齢者が多いです。心配なのは「廃用症候群」、俗にいう「生活不活発病」です。

炬燵に入りっぱなしで、テレビを観て、ご飯を食べて、動かない。それで筋肉が弱ってしまっただけで動けなくなってしまう。もう一つ、閉じこもりつきりで、精神的に鬱になってしまふ。そういう状態を合わせたものを「廃用症候群」と呼んでいます。津島地区にいたときには元気に野良仕事をやっていた方が、避難生活が長くなるにつれて、両杖をつかないと歩けなくなったり、ひどい方は車椅子を使わないと移動できなくなるんです。

紺野 先生はお元気な頃を知っているから、よけい辛いんですね。

関根 そうなんです。一日も早く仮設住宅じゃなく、ちゃんとしたところに住まわせてあげて、希望が持てる、生きがいのある生活をさせてあげたいんです。

紺野 津島診療所にはいま何人の先生がいらっしゃるんですか？

関根 私人が常勤でいて、あと月曜日から金曜日まで先生方が交代で診療しています。浪江町で開業されていた先生にもお願いしているんですけど、先生がいらっしゃるその曜日を調べて遠くからみえる患者さんも多いんです。県外に避難されていて、たまたま福島に戻ってきたので、顔なじみの先生に診てもら

紺野美沙子

Misako Konno

昭和55年、NHK連続テレビ小説『虹を織る』でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかわら、国連開発計画親善大使に任命され、国際協力の分野でも活躍している。平成22年から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。

らいたくて来たというおばあちゃんなんか、待合室で待っているときから涙を流しているんですよ。

紺野 患者さんとお医師さんの絆を感じますね。

関根 医師の仕事は、病気を診るだけじゃないんですね。そういうえば、四月から皮膚科の女性の先生に週に一回、埼玉からお手伝いに来てもらっています。東北の地域医療を応援してほしいという、この企画の呼びかけがきっかけになったそうですよ。

紺野 ほんとうですか。それはすごくうれしいです。一人でも多くのお医者さまが力を貸してください。これからは呼びかけを続けていきます。

